座長のまとめ（10－13）

松永　喬（奈良医大）

10番佐伯(奈良医大)は、通年性鼻アレルギー患者37名に¼ vialと1/10 vialで週3回計12回施行し比較した。全体の有効率は成人77%、小児74%で、成人では¼ vial群の方が有効率が高かったが小児では両者差はなかった。全患者の50%に血清ヒスタミン固定能の改善が認められ、これは臨床症状の改善と相関した。これに反しＲＡＳＴスコアーの改善は少なかったと述べた。

11番石岡(名市大)は愛知・三重・岐阜3県下の9施設で10才以上の通年性鼻アレルギー患者67名に⅓ vialと¼ vialで、その回数、投与量、投与期間を検討した。⅓ vial、週3回計12回の有効率70.8%が一番よく、1週目で半数が効果をあらわし、鼻閉型に有効で、ヒスタミン固定能は改善するが、RASTスコアーの改善が少ないと報告した。

12番岡崎(広島大)は50名の通年性鼻アレルギー患者に¼ vial、週2～3回、総投与量3 vialで判定し、有効率76.0%でとくに鼻閉くしゃみ型、重症例に改善が多く、ヒスタミン固定能改善、誘発反応減弱化、鼻汁エオジン低下を認めたが血中エオジンは不変で、投与をやめても1週間は効果は持続すると述べた。

13番椿(国立王子)は72名の鼻アレルギー患者を15才以下と16才以下の2群に分け、前者は1/10 vial、後者は¼ vialを週3回、計12回で検討した。前者の有効率は67.7%、後者のそれは60.0%で、くしゃみ鼻汁型、重症型に有効で3回までに50%、6回までに80%に効果があり、短い期間につめて行なった方がよく、臨床効果はなくてもヒスタミン固定能は改善すると結論した。

以上まとめると鼻アレルギーのヒスタグロビンエアロゾル療法は⅓ vial週3回計12回が一番有効率(約70%)が高く重症型によく、鼻閉はくしゃみ・鼻汁に比しておとるが他剤に比べて効果がよく、2週位で効果があらわれる。ヒスタミン固定能は半数に改善するが、RASTスコアーは改善しない。副作用は危惧するものがなく、今後の臨床成績が更に待たれる次第である。